あの、夏の日の思い出。

水城翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの、夏の日の思い出。

【Ｎコード】
Ｎ１６３５Ｄ

【作者名】
水城翼

【あらすじ】
私達は、今日も暑い教室の中で談笑を続ける…。幼馴染の仲良し五人組の、友情の物語。

第1話：絆

＊＊＊

あの、夏の日の思い出。
みんなで一緒に過ごした日々。
私達は、忘れない。

＊＊＊

私達は、それぞれに将来の夢を持ち、そしてそれに向かってそれぞれがんばっている。

七月。なんだか暑く成りだしてきた頃。
放課後のすっごく暑い教室の中、私達五人は談笑を続けている。
私達は幼馴染で、誰よりも仲がいいと言ってもいいくらいだと思う。

「私、将来は拓也（たくや）のお嫁さんになるー！」

この子は葉月美緒（はづきみお）ちゃん。
みおちゃんは、将来は幸せなお嫁さんになるのが夢の、可愛い女の子。

「は？何言ってるんだよ、美緒。俺はなぁ、世界一の警察官になるんだぜ！？お嫁さんなんかいらねぇ！！」

睦月拓也（むつきたくや）…拓ちゃんは、世界一の警察官になって、みんなを幸せにするのが夢なんだ。

「わぁ、たっくんひどいっ！せっかく美緒ちゃんが必死にアピールしてんのに！」

水無藍（みずなしあい）ちゃん。

あいちゃんは、保育士になって、小さい子の可愛い顔を見て癒されながら幸せに暮らすのが夢なんだって。

「でも、そんな拓也が私はだいすきなの～！」

ぎゅう、と拓ちゃんの腕にしがみつくみおちゃん。

「まぁ、誰がどんな夢を持ち続けても、応援し続けていこうぜ。」

笑って私達に呼びかけたのが、泉弘斗（いずみひろと）…ひろちゃん。

ひろちゃんは、将来野球選手になって、ずっと自分の好きなこと（野球）をして幸せに暮らしたいんだって。

私は相崎未来（あいざきみらい）。

将来の夢はみんなが幸せになれるような曲を作ること。

最近楽しいことは、この蒸し暑い教室で放課後、みんなと楽しく過ごすこと。

私はこのためだけに学校に来ている！と言い張っても良いくらい、この時間は大好き。

どうして、こんなことになってしまったのだろう。

幸せな日常というのは、とてつもなく儚いもので。

このとても楽しかった日常が、非日常となるのに、そう時間はかからなかった。

第1話：絆（後書き）

はい、ということで。
まだ前の話が書き終わっていないというのに、連載開始です。
すみません。
感想をいただけるとうれしいです。
この作品の裏話などを返事に書こうかな、と考えております。

第2話：涙

「ごめんっ。今日、あたし用事があるんだよねー。」

あいちゃんが言ったその言葉。

…思えば、このときから世界は狂い始めていたのかもしれない…。

「あれ？そうなの？」

「じゃあ今日はこれでお開きだな。」

残念そうにみおちゃんと拓ちゃんが言う。

なぜ残念そうなのか、なぜお開きになってしまうのか。

それは、昔の出来事がきっかけでできた私達の暗黙の了解からだった。

この間、ひろちゃんが用事で居なかったことがあった。

それでも一応放課後残って話していたんだけど、それがとてもつまらなくて。

ひとりでもかけてしまったら、だめなんだ。

「ほんっとにごめんね！じゃぁね！」

「うん、また明日ねー！」

私が手を振ると、あいちゃんも手を振り返してくれた。

「明日は、あいちゃんが来れるといいね。」

「…そうだな。」

私が言うと、ひろちゃんが返事をしてくれた。
…そう…。明日こそは…、きっと。必ず…！

＊＊＊

「え？今日もなの？」
「ごめんね！ちょっと用事が長続きしちゃって…。」

次の日も、あいちゃんは用事があるらしかった。
その次の日も…。その次の日も……。

＊＊＊

「おい、藍」

あいちゃんが放課後の談笑に来なくなって一週間。ついに、その『事件』は起きたのだった…。

「最近、すごく来なくなってるよな」
「っ…。え…、ご、ごめん…。」

…拓ちゃん…？

「ど、どうしたの？拓也…。」

みおちゃんが動揺した口調で言う。
言葉には出さないけど、私もひろちゃんも動揺している。

「俺達は、お互いの夢を応援しあうためにいままでやってきたんだろ。」

拓ちゃんがあいちゃんに詰め寄る。

「俺達の輪の中に入れないなら、お前はもう来るんじゃねぇよ！！」

拓ちゃんが…叫んだ。

今までに、拓ちゃんの口から聞いたことのないような激しい言葉が、拓ちゃんの口から飛び出す。

「…たっ、くん…」

あいちゃんの震えた声を聞き、ようやく拓ちゃんが我に返る。

今までの態度が嘘のように、目が泳ぎだす。

「…あ…、ご、ごめ…」

「…もういいよ。」

拓ちゃんの謝罪をあいちゃんがさえぎった。

「…え…？」

「もういいよ！…今まで、ごめんね。もう、あたし抜きでもいいよね！いいんでしょ！？だからそうやって言うんでしょ！？」

そう叫んで、あいちゃんが走り出してしまう。

「あいちゃん！待ってよ！！」

少し強引だけど、私はあいちゃんの腕をつかむ。

「…もう、私のことなんて放っておいてよ！！」

あいちゃんの頬に涙が伝う。

そのまま、あいちゃんは私の腕を強引に振り払い、走り去ってしまった。

「…あいちゃん…」

第2話：涙（後書き）

ここまで読んでくださって、ありがとうございます。
質問や感想などありましたら、メールを送っていただけるとうれしいです。
よろしくお願いします。

第3話：空

…それからというもの、放課後の教室はまるで誰も居ないかのような静けさを持っていた。

私達が、居るというのに。

拓ちゃんは何か思いつめたような表情で考え事をし、
みおちゃんは椅子に座り、うつむいたままで、
ひろちゃんはベランダで空を仰ぎ、
私は…それをずっと見ていることしかできなくて。
こんな悲しい光景、見ていられなくて。
あやうく、目をそらしそうになる。

その時。

「私っ。やっぱり藍ちゃんのところに行ってくるっ！」

ガタリと音をたてて席を立つ、みおちゃん。
そして、自分の荷物を持って走り出す。

「みおちゃんっ！？」

私も慌ててみおちゃんを追いかけようとするけれど。

「未来」

ひろちゃんの、私を呼ぶ言葉を聞き、立ち止まる。

「何…？ひろちゃん…。」

「今は、美緒に任せておこう。」

「でっ、でも！！」

ひろちゃんを見る。

ひろちゃんは、私をじっと見つめていた。

その、力強い眼差しに、ぞくりとする。

…何なんだろう。この感じ。

彼の有無を言わせないような眼差しに、私はこう言うしかなかった。

「…分かった」

しばらくして、私はひろちゃんがいるベランダに行った。

「ひろちゃん…。」

「…何？」

ひろちゃんは、空を仰いだ状態のまま、返事をした。

私はひろちゃんの隣に行き、同じように空を仰ぐ。

「…どうしてだろうね」

「え？」

空は、どこまでも、青く澄んでいた。

「…どうして、こんなことになっちゃったんだろうね…。」

雲一つない、青い、青い空。

「あの、楽しかった日々は…どこに行っちゃったんだろうね…」

楽しかった日々。

「みんなで過ごした日々は…」

思い出してみると、色々あったことに気付く。

「どこに、行っちゃったんだろうね…？」

みんなで一緒に笑った。
みんなで一緒に泣いた。
みんなで一緒に過ごした、日々。

それは、忘れられない、大切な思い出。

「取り戻したい」

取り戻したい。私達の、幸せな日々を。

第3話：空（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
感想、誤字などありましたらお願いします。

第４話：謝罪

「拓ちゃん」

拓ちゃんに、謝ってもらいたい。
拓ちゃんがしっかり謝ってくれないと、解決しないような気がするから。

「…あの、さ。あいちゃんに…」
「…分かってるよ」

静かに、拓ちゃんが口を開く。

「分かってるんだよ…、謝らなくちゃいけないことくらい…。」

拓ちゃんは、頭をかかえてうずくまってしまう。

「でも、あんなにひどいこと言ったんだぞ？…それなのに…」
「だからこそ、だ。」

ぽつりと、ひろちゃんが言った。

「だからこそ、謝らなくちゃいけないんだ」

ひろちゃんの力強い言葉に、

「でも…、あんなにも、あいつを傷つけてしまったのに…、今更謝っても…。」

小さく…、小さく、拓ちゃんが言う。

「今からでも遅くないよ！まずは謝らなくちゃ！」

今からでも遅くない。
遅いかもしれない。
でも、遅くない。
今からでも、遅くない。
まだ間に合う。
だから…。

「謝ろう」

それで、すべてが元通りになるのなら。

＊＊＊

「藍ちゃん」
「…美緒…ちゃん…」

藍ちゃんは、一人だけで帰り道を歩いていた。
私は、藍ちゃんに話しかける。

「藍ちゃん。…何で一週間も来なかったのか…、教えてくれない？」
「あたし…は…」
藍ちゃんはそう言いかけ、ポケットに手をのばした。
＊＊＊
「あっ、いたいた。あいちゃ――」
「待てよ、何か二人で話してる」
その時、私はあいちゃんたちの姿を見つけ、手を振ろうとするが、ひろちゃんにさえぎられる。
「…？何か、取り出してる…？」
私達は、あいちゃんが持っている物を見ようとじっと目を細めてみた。
すると…。

第４話：謝罪（後書き）

そろそろ毎日更新はきつくなってきました…。
感想、誤字などありましたらよろしくお願いします。

第5話：写真

「写真…？」

「…うん。あたしの…、あたし達の、思い出の写真。」

藍ちゃんはそう、ぽつりと言った。

その藍の表情は、とても満ち足りていて、どこかうれしそうな様子がうかがえる。

その写真に写っているのは、五人の子供。

皆、楽しそうに笑っている写真だった。

「あ…、これ、私だ…」

私がその事実に気付き、その写真の一人の少女を指差して言う。

「私だけじゃない…、藍ちゃんも、みーちゃんもいる…。拓也もいるし、弘斗もいるよ…。藍ちゃん、これ、いつの写真なの？」

「…あたしが、引っ越してきて一週間がたったくらいのときのだよ…。一年生の…」

写真に写っているのは、今の仲良し五人組の小さな姿。

「あのとき、引っ越してきたばかりで、友達が居なかったあたしを…友達にしてくれたのは…。みんなだったよね。」

そう…あの時…。あの時、藍ちゃんの友達になったのは…

＊＊＊

私達が一年生のとき。
あいちゃんが、転入してきた。
あの時のあいちゃんは、友達がひとりも居なかった。だから、私達は…

「ねぇねぇ。わたしたちと、ともだちにならない？」

そしてあいちゃんはあっという間に私達の大切な存在となっていった。

それから、いろいろあった。
喧嘩したり、協力しあったり、笑いあったり…。
春には、同じクラスだとかそうじゃないとかで盛り上がったね。
五人そろって同じクラスだったときには、感動してずっと喜びあったよね。
そういえば、夏休みの宿題と称して夜中にみんなで星を見に行ったっけ。
あのときの星は、とても綺麗に輝いていたよね。
たしか秋には、風に舞う落ち葉を追いかけて遊んだね。
そしたら必ず一人が転んで大騒ぎになっちゃったよね。
冬には、雪だるまとかまくらをつくったね。
みんなと協力してつくったのに、かまくらは結局ひとりくらいしか入れなかったね。

…楽しかったなぁ、あの日々は。
私は、今でもあんなふうに楽しい日々を過ごしたいよ。

みんなも、きっとそうだと思う。
あの、楽しかった日々を、取り戻したいと願っているに違いない。
その証拠に、
あいちゃんは、その頃の写真を今でも持っているし、
みおちゃんは、懐かしそうだけど、少し寂しそうにその写真を見ているし、
拓ちゃんは、あいちゃんと喧嘩したのをとても後悔しているような表情をしているし、
ひろちゃんは、少し寂しそうにその様子を見ていた。

第5話：写真（後書き）

何とか更新することができました。
これも、この小説を読んでくださっている方々のおかげです。
これからも、よろしくお願いします。

第6話：思い出

…でもね、あいちゃん。

さっきの言葉は、ちょっと違うよ。

「友達にしてあげたわけじゃないよ。私達が友達になりたかったんだよ！！」

そう、あいちゃんは、「友達にしてくれたのは」と言ったけれど。

私達が、友達になりたかっただけなんだよ…！

「未来ちゃん！？」

「みーちゃん！」

二人が同時にこちらの方を向く。

二人とも、驚いた表情だったけど、私には少し嬉しそうに見える。

そこに、拓ちゃんがあいちゃんに謝ろうと前に出る。

「藍っ！！」

「…たっくん」

あいちゃんの顔が一気にこわばる。

「悪かった！あんな、無神経な事言って…」

しかし、その台詞を聞き、こわばった顔は、一瞬にしてやわらぐ。

「…いいんだよ。あたしが放課後に行かなかった理由を言わなかったのが悪いんだし。」

いいところで悪いんだけど、気になったことを一つ聞くことにする。

「でさ、あいちゃんが放課後に来なかった理由って何なの？」

「うん…。それがね…」

あいちゃんは、にっこりと笑って話し始めた…。

「あたし達が、友達になった日の記念パーティをやろうと思って…ずっと用意してたの…。」

悲しそうに、あいちゃんが笑う。

「黙っててごめんね。でも、みんなを驚かせたくて…」

あいちゃんのその言葉に、拓ちゃんはよりいっそう申し訳なさそうな顔をする。

「…っ…。俺こそ、悪かった…。そんな理由があったなんてよ…」
そして、二人はお互いにだまりこんでしまう。
そこで私は、みんなにある提案をする。
「…じゃぁ、あいちゃん。もうパーティの準備は出来てるの？」
「あ…、うん。だいたいは。」
あいちゃんの答えは、私の提案にとってとても助かる答えだった。
「じゃぁさ、これからやろうよ！仲直りの記念もかねて！」
私の提案に、あいちゃんはぱぁっと笑顔になってくれる。
「う…ん！そうだね！！」

＊＊＊

そのあと、私達は友達になった日の記念パーティと仲直りパーティをやった。
記念パーティでは、みんなが今までで一番印象深かったことなどを話して盛り上がった。
例えば、
「みんなで海に行ったとき、思いっきりカニに指挟まれてるヤツがいたよなー」、とか。
指を挟まれていた本人は、斜め上方向をじぃ～っ、て見てたけどね。
あとは、

「雪が降ったときに、雪だるまをつくるか、かまくらをつくるかで口論になって、取っ組み合いの喧嘩にまでなったよなー、ああ、懐かしい」とか。
そう、しみじみと言っていた本人も、取っ組み合いの喧嘩をしていたような気がするんだけど…。とは思ったけど、そこで言っちゃぁまずいことになりかねないから。
で、その結果。
かまくらの上に雪のたまをのせることになりました～。
でも。
重量オーバーで、かまくらまでつぶれちゃった。
…という、悲しい思い出とか。

その次は仲直りパーティということで、仲直りに関しての約束をひとりずつ言っていくことになった。

まず、私の番。
「じゃあ、約束しよう！！これからは、絶対に喧嘩しない！したとしても、必ず仲直りする！！」

次に、みおちゃんが言った。
「放課後来れないときは、しっかり理由を伝える！勘違いがないように！」

拓ちゃんが言う番だった。
「仲間と過ごす時間を大切にする！たとえ、これからその時間が減ってしまうとしても！！」

あいちゃんの番。
「仲間を一番大切にする！仲間がいなくなることって、つらいことだと思うから…。」

最後に、ひろちゃんが言った。
「仲間がいる幸せをかみしめて毎日を過ごす。絶対にそれを忘れたりはしない！！」

＊＊＊

私が、ある話題を切り出した。

「ねぇ、みんな。聞いて、くれるかな？…拓ちゃんと、あいちゃんが喧嘩した次の日からかき始めた曲があるんだけど…。」

そう言って私はパソコンを取り出す。
そして、曲をかける。
この話題を切り出したのには、ある理由があったからだ。
この曲には、私のあの灰色の日々の思いが詰まっている。

友達が居ることの喜び。

友達が一人居なくなることの悲しみ。

友達と過ごした日々。

それは、どれほどまでに輝いていたのかを。
それを、みんなに知ってほしくて、作曲したんだ。

「題名は…“あの、夏の日の思い出。”」

第6話：思い出（後書き）

やっぱり小説を消すのやめました。
なんとなくもったいなくて…

7話は消させていただきました。

この小説もここで完結です。更新予定は、ありません。
読んでくださった皆様、そしてアドバイスをくださったMさんとMさんとSさんとRさん。

ありがとう。みんなみんな大好きだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1635d/

あの、夏の日の思い出。

2010年10月15日01時36分発行